

桜美林大学基盤教育院サービス・ラーニング・センター公開FD
「サービス・ラーニングの学習効果」
第二部

日時：2014年9月12日(金) 14:00～14:50

参加者(敬称略)

報告：室岡 一郎(基盤教育院)、藤崎 いずみ(芸術文化学群)、

土橋 敏良(キリスト教センター、チャプレン)、

矢野 眞和(大学院大学アドミニストレーション研究科)

司会：牧田 東一(サービス・ラーニング・センター)

概 要

第二部の趣旨説明(牧田より)

第一部では、各教育組織の教員からそれぞれのサービス・ラーニング科目の2013年度の授業実践報告をしていただいた。第二部では、第一部を受け、各パネリストの専門あるいは教えている科目の観点からサービス・ラーニング(SL)の「学習効果」について、やや客観的な観点から報告をお願いしたい。

最初の室岡先生は、2013年度に基盤科目の「文章表現法」のクラスの1つをサービス・ラーニング科目にしてくださいと、初めてSLの実践をしていただいた。室岡先生にご報告をお願いした理由は、基盤科目という一見ボランティアや社会貢献活動とは無縁の基礎科目であっても、SL科目とすることが出来るという点であり、かつ基礎科目でSLを実践する場合に特殊な課題などがあるかもしれないという考えからであった。また、ボランティア活動部分を基盤科目の「地域社会参加 私たちに身近な貧困」での山谷のホームレス支援活動に参加する形をとったところも重要なポイントである。今後、SL科目が増えるに連れ、このように複数の科目でボランティアを共通に持つ必要性も高まってくると思われる。その際にどのような課題があるのか、も重要なポイントである。

2番目の土橋先生は、キリスト教センターでの実際の活動に基づいて、「キリスト教育

とサービス・ラーニング」についてのお話をお願いした。本学におけるサービス・ラーニングは、建学の精神である「学而事人」に基づくものであるが、実際にはキリスト教科目では受講生が多いため、SL科目になっているものは2013年度にはまだ存在していない。しかし、キリスト教センターが実施している活動は単位にはならないがSLである。SLにおけるキリスト教主義という視点は本学の場合、非常に重要なので、実践神学の観点から、建学の精神に依拠した価値教育としてのサービス・ラーニングについてお話をお願いした。

3番目の藤崎先生は、美術の教育において、学外での学生の活動を支援してきたという点がポイントである。少なくとも2013年度においては、サービス・ラーニング科目ではなく、学生の学外での美術活動はあくまでも授業外である。趣旨的には、サービス・ラーニングに近いものであっても、必ずしもサービス・ラーニング科目とすることが出来る、あるいはするのが適切であるとも言えない。授業外であることのメリットも当然考えられるからである。そうした観点から、藤崎先生の実践に注目した。また、本学においては芸術文化学群の学生たちの地域での芸術活動がかなり行われており、音楽は2014年度からSL科目を持つようになったが、他の芸術活動について今後SL科目をどう考えるか、どのような課題があるのか、も藤崎先生にご講演をお願いした重要なポイントである。

最後に、矢野先生はご専門が教育学であるため、第一部と第二部のみなさんの話を踏まえて、教育学から見た「地域活動と教育」の意義についてお話してもらいたいと考えた。また、高等教育がご専門であることから、大学におけるSLの意義、また本学のSLへの批判的な問題の指摘などが、もしあれば、高等教育の幅広い視点からコメントをお願いした。

報告：「基礎教育科目におけるサービス・ラーニング導入の可能性と学習効果 — 文章構成法とサービス・ラーニング —」 室岡 一郎

1. はじめに — 科目紹介「文章構成法」 —

基盤教育院で「文章表現」の科目を担当されている室岡先生からは、2013年度よりサービス・ラーニングを取り入れた「文章構成法」についてご発表いただいた。

基盤教育院は、主に初年時教育を担いつつも、一部において全学生を対象とした教育を展開している。「文章構成法」は後者の一つであり(全学二年生以上対象)、論文の書きかたや論の組み立てかたを学ぶ選択科目となっている。同科目では、800字から2,000字の

ミニ論文をいくつか書きながら、論文執筆の基礎を習得していく。終盤ではグループワークを重ね、4,000字以上の「最終論文」を書き上げる。

一見すると、同科目はサービス・ラーニングと縁遠いように思われるかもしれない。しかし、当日の発表からは、その学習効果について知ることができた。

2. サービス・ラーニング導入の背景

同科目においては、これまで論文のテーマを学生の関心にもとづいて自由に選ばせていた。しかし、得てして「実感のない調べ学習のまとめ」になりがちであり、ともすればウェブ上の情報を切り貼りした内容になってしまうことがあった。また、世の中でなにが起きているか、世の中の仕組みがどうなっているか、学生はその基礎知識に欠けていた。

そこで、「結果的に未熟な内容になったとしても、筆者の問題意識が実感できる等身大の論を組み立てたい」「論じる目的、探求(調べる、考える)の目的をしっかりとってほしい」という教員の思いから、サービス・ラーニングが取り入れることになった。

3. 2013年度春学期の取り組み

同科目の学習到達目標は、「論文の書きかたや論の組み立てかたを身につけること」と設定され、時間外学習の方法として、社会活動が取り入れられた。到達目標と社会活動とは、必ずしも完全に重ならなくてもよく、学生が社会活動で感じ、考えたことをもとにテーマを絞り、論文の書きかたや論の組み立てかたを身につけることが目指された。

今回、社会活動は、同じ基盤教育院のサービス・ラーニング科目である「地域社会参加(わたしたちに身近な貧困)」の野宿者支援活動と予め設定されていたため、学生は月に1回、野宿をしている当事者のごはんづくりや医療相談の活動に、また希望者はさらに夜回りや勉強会に参加した。そして、授業では、活動のふりかえりやディスカッションを重ねて、「最終論文」を組み立てていった。

4. 学習効果

当日は、学習効果として以下のことが共有された。

- 学生に実感のある「疑問」がわくようになった。事実を踏まえて具体的に考えられるようになった。
- 野宿者支援、貧困という大きな問題から、自分なりの「問い」を立てるプロセスが明確になった。

- ステレオタイプの考察からの脱却が感じられるようになった。たとえば、野宿者の人生観。
- 知らなかったこと、知っているつもりになっていたことがたくさんあることを知る。
- 知りたい、事実を確認したい、問題をなんとかしたい、といった強い動機づけが得られる。
- なんのために学び考えるのか、その目的が明確になる。
- 社会と個人の間を強く意識するようになる。
- 授業終了後も活動を続けたいと考えるようになった学生もいる。

5. 今後の課題

今後の課題として、まず履修者数の少なさが挙げられた。学生はシラバスを確認せずに登録する者が多いため、初回の授業でサービス・ラーニング科目であることを知り、登録削除をする学生も多い。秋学期は、履修者が少なく閉講であった。「履修者が5人以上の場合、開講」という本学のルールを満たすには、履修者数を増やす工夫が必要である。

そして、成績評価をどう考えるか、論文の完成度(学生による学習到達目標の到達度)と活動への取り組み姿勢をどう評価するかについての課題の共有もなされた。他のサービス・ラーニング科目においても共通する事項であると思われる。

最後に、活動について、以下二点の課題が提示された。一点目は、社会活動が「地域社会参加(わたしたちに身近な貧困)」の担当教員におんぶにだっこ状態になっていること、二点目は、野宿者支援は学生にとってハードルが高いことから、これ以外に、個々の学生の関心に沿った活動を用意するなど、活動内容にバリエーションをもたせられないかということであった。二点目については、学内のサービス・ラーニング推進を担うサービス・ラーニング・センターの検討するべき事項とも思われる。今後のセンターの課題として、頭に入れておきたい。

(文責：林 加奈子)

報告：「サービス・ラーニングの学習効果 実践神学の観点から」 土橋 敏良

はじめに

桜美林学園キリスト教センターでは、センター主催のサービス・ラーニング・プログラ

ムを長期休暇の際に実施しており、今回はセンター主催のプログラムや意義等をご報告いただいた。キリスト教センターにおけるサービス・ラーニングでは、キリスト教実践神学の立場から、宗教的人間観に立脚しながら本学建学の精神「学而事人」につながる人間形成を行われていることを知ることができた。

1. キリスト教実践神学の立場から考えるサービス・ラーニングの意義

キリスト教センターでは、学生ひとりひとりのエンパワーメント強化のためにセンターで実施するサービス・ラーニングの意義を下記の通りとしている。

- ①「ラーニング」と「サービス」を連携させながら、建学精神「学而事人」に依拠した価値教育を実践する複合的な教育コンポーネント
- ②桜美林大学の教育理念を具現化させ、内発的動機付けを活性化させる課題提起型の学習プログラム
- ③奉仕（貢献）活動のもつ社会的役割や教育力を活用し、学んだ成果を諸課題の改善・解決のために役立てる。大学で学ぶ意義と、それを社会生活に還元する喜びを味わう。

2. キリスト教実践神学における3つの前提

一つ目に、教育基本法第9条第1項にある「宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は、教育上これを尊重しなければならない。」という考えに基づいている。人格の存在を認識し、人格の尊厳を自覚する意識というものは、本来は宗教的なものであると考えるからである。

二つ目に、祈りによって形成される大学は、少なくとも世界の苛立ちに代わる忍耐を具体化する諸学問を生み出す可能性を有している。このことから、キリスト教主義大学における諸学問の可能性を設けるとして、先に述べたように宗教的人間観に立脚しながら、これらの計画や方策が大学の具体的な取り組みへの努力が払われているかどうかを顧慮しなければならない。

三つ目に、価値教育の具体的な展開ということで、市民性教育・宗教性教育・多文化教育等の「価値教育」に関わる教育実践があげられる。精神的なもの、目に見えない価値を見出し、「建学の精神」＝「学而事人」を想起させる人間形成・人格教育プログラムを実施する。

3. サービス・ラーニング成立の背景

現代は、個人主義化が進み、経験値が低く、自己肯定感が持てないなど学生が変容して

いきていると考えられる。このことから、キリスト教センターでは、職業人育成の基礎としての市民育成を目指してサービス・ラーニングの導入が行われることとなった。

4. サービス・ラーニングにおいて実践神学が重視する3つのこと

サービス・ラーニングは、大学で得た知識や取り扱われる「理論」と現場（コミュニティ）で得た「体験」との間を結んでいく作業（リフレクション）に重点が置かれる点で、従来のボランティア活動よりも知的性格が強いと考えている。

「才能は心に宿る」ということ、「大事なものは言語化し、分かち合うこと」を念頭に、下記の3つのことを重視している。

- ①奉仕体験から学んだことを自ら振り返り、心と知識に取り込んでいく心的成長過程を重視。
- ②価値観のせめぎあいを経験させる省察を重視。
- ③リフレクションのプロセスとしてのシェアリング（分かち合い）&メディテーション（黙想）を重視。

5. キリスト教実践神学におけるリフレクションの3つの要諦

- ①「理論」と現場で得た「体験」を結んでいく作業であると同時に、現場での「出会い」の中から生まれ心的交流の過程を省察する。
- ②一般的な乾燥・考察・課題を述べ合うだけでなく、自分自身の内面と向き合い、心的成長・変化を伴うダイナミズムがどのように生じたかを（他者の評価を気にせず）率直に語り合い傾聴しあう。
- ③ファシリテーター役のチャプレンは、「今回はこんな事を学びましたね」などと意味づけをしたり、価値判断の押し付けはしない。それぞれに固有の結論があるというマルチ・エンディング・ストーリーの学びを実現する。

以上3点を踏まえ、サービス・ラーニング・プログラムを経験することで「自己／他者／世界」の関係が豊かに編み出されていくと考える。

- リフレクションの一例（分かち合いを重視したシェアリング・プログラム）

部屋の照明を落とし、輪になりお互いの顔がよく見えるように着席

1. 黙想（メディテーション・意識の集中）
2. 導入（雰囲気を整え・リフレクションの説明）
3. 合唱（テゼの歌・参加者の心を一つに）

4. リフレクション(省察の言語化と相互傾聴)
5. 合唱(新しく得た出会いと経験を感謝しつつ)
6. シェアリング(分かち合い)
7. メッセージ(参加者への感謝・労い・励まし)
8. 黙想(チャプレン・ファシリテーターの祈り)

6. サービス・ラーニングの教育指針

ジョン・デューイは、「民主主義の社会は、多様な人々が共に暮らす生き方の哲学が具現化したものである」と述べているが、社会を学問的にどれだけ精緻に分析しても、それだけでは学生の人格を創造的に形成していくことはできない。

このことから、サービス・ラーニングは、創造的寛容をわきまえた「共生」のあり方について、主体的に考える機会を与え、学生の社会的自立・人生の目的意識の確立をバックアップし、学生の社会的・精神的自立を支援する。高等教育はその最終段階を見届ける責務を担うということが言えるだろう。

7. サービス・ラーニングの学習効果 キリスト教実践神学から3つの見解

大学教育は、人の命を支える根をより太く長く人生の土台に張り巡らすための最終段階の教育課程を担う機関である。社会のあらゆる場面で起こる人々の痛み・悲しみ・喜びと直接出会うことによって心揺さぶられ、その中にキリストは存在し、癒しと愛の行為が求められていることを知る機会としてキリスト教センター主催のサービス・ラーニング・プログラムでは強調している。

二つ目は、学生が自己の弱さや社会の弱さに触れ、その弱さや痛みを共有することによって、共存・強制的価値探求へと導かれることである。

桜美林の人間教育は、人格形成もしくは人格の変容を目指すものであり、形成された人格がさらに公共に奉仕するまでに至らなければならないと考える。そこで“Social Character”が育成され、献身的な生き方の実践・習慣化が目指されていく中で、桜美林のモットーである「学而事人」のキャラクター・エデュケーションが完成することを3つ目の見解としている。

8. キリスト教センター サービス・ラーニングプログラム (2014年度)

▶ 大島藤倉学園ワークキャンプ

実施期間：8月11日(月)～8月15日(金)

実施場所：社会福祉法人大島藤倉学園(知的障がい者生活支援施設)

東京都大島町字馬の背128

概要：施設内でのボランティア活動ならびに20～70歳代の知的障がい者の入所者の方々との交流体験プログラム。

▶ アジア学院ワークキャンプ

実施期間：8月20日(水)～8月23日(土)

実施場所：アジア・アフリカ農村指導者養成専門学校(アジア学院)

栃木県那須塩原市槻沢442-1

概要：アジア、アフリカ各国を中心に世界各国から派遣されてきた、国籍、民族、宗教、職業を異にする留学生たちと共に、循環型社会の仕組みづくりを学び、世界平和の願いを共有する。

(文責：金城 さつき)

報告：「サービス・ラーニングの学習効果 — 芸術の観点から —」 藤崎 いづみ

概要

芸術文化学群造形デザイン専修の教員である藤崎先生からは、芸術にかかわるふたつの教育実践についてご報告いただいた。ひとつは、2012年度および2013年度春休みに相模原市の美術施設である「アートラボはしもと」において開催された卒業研究選抜作品展「基点と起点Ⅰ・Ⅱ」であり、もうひとつは、2014年度初夏に実施された「COUMS 合同大学祭 in FC 町田ゼルビア」でのゼミ生によるフェイスペインティング活動である。両事例からは、教室における授業の枠を超えた教育の営みの効果と、その営みをともに作り上げた学生たちと教師、そして地域の方々との協働を知ることができた。

これらの活動は、現在どちらも授業としてではなく、課外活動として実施されており、サービス・ラーニングの認定はされていない。しかし、学生が自らの専門性を活かして地域貢献している点はサービス・ラーニングに共通の要素となっている。今回、発表をお願いしたゆえんである。

なお、これら実践については、『OBIRIN TODAY 教育の現場から Vol.14』において、「フットボールにおける造形美術デザインの表現研究と教育 — 総合大学における造形美術教育指導の立場からⅡ —」として詳細が報告されているため、本稿では内容を割愛し、活動の様子が分かる写真のみ掲載する。

卒業研究選抜作品展「基点と起点Ⅰ・Ⅱ」



紙版画ワークショップ風景



紙版画ワークショップスタッフ



壁広告



壁広告制作スタッフ

COUMS 合同大学祭 in FC ゼルビアでのフェイスペインティング



フェイスペインティング中



フェイスペインティングスタッフ

(文責：林 加奈子)

報告：「サービス・ラーニングの学習効果 — 教育学の観点から」 矢野 眞和

報告概要

矢野先生は著名な文化人類学者の川喜多二郎先生のゼミでフィールドワークに参加された経験から話を始められた。大学や大学院での数多くの授業、その中には著名な先生の授業も数多くあったはずだが、そこで聞いた講義内容の大半はほとんど記憶に残っていない。それだから意味がないということではないが、講義で話される細かい知識の大半は、必要になったときにまた調べられればそれでよいのであって、実際には記憶に残らないものであると、話された。他方、川喜多先生のゼミでのフィールドワークは今日になっても極めて鮮明に記憶に残っており、そこで学んだことや体験はその後の人生で大いに役に立っている、と強調された。

矢野先生によれば、そもそも、現在の大学教育、あるいは日本の教育全体が知識偏重になりすぎており、より学外、社会、あるいは現場での活動やそれを通しての体験を重視すべきなのである。文部科学省もそのあたりのことは気づいてきており、サービス・ラーニング、アクティブ・ラーニングなど学外での活動を重視する方向で今後教育行政が進められることはほぼ間違いないと思われる。キリスト教主義を掲げる桜美林大学がサービス・ラーニングに力を入れようとするのは当然であり、多くの先生方がサービス・ラーニング

に取り組んでおられることは正しい方向である、と矢野先生は肯定的に現状をとらえておられた。

この公開 FD での報告から見えるように、SL 科目での学生の学びが優れたものであるということは容易に想像できることであり、今後 FD などを通して教員間の経験共有が進むにつれて、日本でもサービス・ラーニングが定着していくことは望ましいことであり、桜美林大学でもその方向で進むべきだと述べられた。矢野先生によれば、サービス・ラーニングはこれからの中心的な学びの方法になる、ということである。

しかし、報告された授業実践を見ていると、学生のボランティア活動を授業に取り入れることは教員にとって非常に大変な負担であり、このような実践をされている教員の努力は高く評価されるべきであると指摘された。他方で、教員、学生ともに時間的、経済的負担の大きいサービス・ラーニングを全学的・制度的に広げていくためには、大学当局の教員・学生への積極的な支援が重要であり、大学側のより一層の財政的、また人材的な資源投入が是非とも必要であると強調された。

(文責：牧田 東一)